

特45

735

大曠道人草稿

完

大暎道人草稿



此大暎師は、功名を原卯吉といひ、紀の國和歌山湊甚五兵衛町に
 すめり、原某の子にて、そのかみ和歌の浦なる玉泉院實裕法師に
 つかへ居けるほど、我も柿園大人を慕ひて和歌山にゆき、志ばら
 く此玉泉院に身をよせたり、院のあるじ歌好みの人にて、常に人
 を集へなとしてよむ、いつの折はありけむ、歌むしるを廣げて
 人々きそひよむはしは、卯吉ぬしわが袖を引動かして、此むしる
 に出たる題の歌、我も試みによみたれども、出しなば師のさめし
 らあせそと咎め給はむゆとて、秘めたりといふ、以てさるこ

とのばべらむ、師の好み給ふ道はして殊にめぐしと志給へる、而
子にあれば、見めて給はむは疑ふべくもあらざ、いぬによみ出
給へるにぬ、見せ給へとうみがせば、志ぶくに出しぬ幼子のは
じめてよみしにも似ず、意も詞も心とよく調ひたるに感けて、頓
て其むしろに、もちいで、人々に見せ此才の優れたるを辨へけれ
ば、あるじの師いたく心ゆくさまして此子歌よみにならむと、あ
らば、よきに導きてよと、あたらしられき、此のむね主ふ傳ふれ
ば、いぬありやとて、これより日毎にみついつと、あるは十まり
などもよみつと、わが文机の前よ来て筆加へむことぞ乞ふ、めく
するほど、日にそへてぞめしき歌あまた見ゆるうらに、我がうく

筆加へたりとて何のうひりあらむ、師に乞ひて家はりへり、早く
柿園大人はつきて學び給へと、いひすよめ、此事をりれこれ中と
りもちて、主と家にはりへしつれども、いまだ柿園へ導きゆらざ
るほどに、めくりあく大人世を去り給ひしこそあたらしけれ、お
のれ和歌山に歸り、一とせばかりすみけるほど、明兼訪ひ来て、
歌よみ書論ひなどするに、總て並々のたぐひにあらざ、此頃年齢
は十と四五、こえしばかりの若子にて、生ひさきいご頼もしく思
へるも、別れぬへり後には、國の事にがうつらひて、五とせ六と
せおほと音信をも得せざりき、文久三年八月世を志のぶ身となり
て、和歌山に脱れゆき、一夜夢の如くにゆきあひ、法師と身とを

へ居らるゝに驚きて、其故を問へば、髪のぬけ落る病に罹りてお
くみれり、と乃答へてこそきつれ、我身志ばしも足ととどめあ
へぬ折はて、歌語りなどはふつに得せねば、學の道に心あはり
進まれたりやは、辨へ知るべくもあらざ、ただちに立列れぬ、と
て後世とせばありを經て、足立正聲の箱根の出湯に物する道にゆ
きあひ、此稿と見て、身まらられしと知りし時の胸とどろき、い
らばありにありけむ、歌は總て調べ安らふよして、人の思ひあ
くべあらざる趣きあり、長きはわきて難きものなるをも、いと妙
によみなし、文に至りては、雄々々き調べに、風流なる意ばへを
述べたる、古今にたぐひ稀みらむと見めで、跋文は活版にして云

云とゆきは、やがて世は公になりぬべしと、まちわたると、さる
ことも絶てきこえ申、年頃いと惜しく思へるは、去年の夏、
友なる湯本文彦が都より歸り来て、此稿を得たりと告るを聞くう
きしさ、雨夜に星を見いせたる如くなりき、借りうけつらくと
み見きは、更はめをたくなづあしく、限りなきなめ先をしつと思
ひあへせば、再度まで此遺稿にめぐりあふは、世を隔ても、昔な
おらのむつ魂あひはこそと、よく印刷に物することよはなりぬ、
願ふら心しするは、飯田氏の評なり、見む人あなまとして、うち
たるまやと、ふり見はせらるゝ物あら

明治三十年二月

此としりき
趣なくみよ
して詞とる
ごとく意たか
くして味ひ
深しかゝる
法の師の歌
人こそ世よ
ありかゝか
るべかれ

歌ばかり、どろき物とあらじ、何がしれ大徳が、我邦の陀羅尼
ごと、いらゝも、うづることふて、たつみある言葉ふ、無量れ
義をふくめて、おのづから聖教のむねよなかたへも、ふるき歌ふ
り、いと多あり、こまやあのもくも歸るも別きて、とよめるが、
十二因縁輪轉の意ふ似たり、さて、打わびてよばよむ齋ふ山彦の、
といへるも、戀愛の癡情とのべたる歌ながら、おのづから、感應
道交のむねを合めるが如き、猶おのためしと、おどふる時を、演
の真砂ふひとしうあむ、慧心僧都れ、と一子とちふ、諷詠をゆ
るし給へる、たと西行上人の、吉水僧正ふ、歌道とすしめられし
など、皆つる心ふ、こそよらきけらし、おしきき法師の歌よむい、

例 土佐日記の

畢竟、觀心のとすけふをあり、春のあしと花ふむるひてり、盛者
必衰れおもむきとうたひ、秋の夜月をなほめてる、真如清淨のこ
ころをればんふ、よしや佛果の近因とい、ならむとも、らぬてり、
菩提の速縁を結ばざらむ、とべて吟咏の所縁となるところ、山水
れとよきまひをたじめ、森羅萬像ふ此おもひを運びて、心靜ふる
ちほんじとらむふい、なぬくふ、よき歌もよみ得べきぞかし、
さると語勢の緩急や、氣韻の高下など、とゆうれ事ふゆづらひ
て、ひととら、心とをやますい、我よくよみて、世ふることむの
とさびなれば、法師のうへよい、さぬほしがり、又おのがじと讀
出とる歌を、ものよぬいしるして、あはれ、あき世まで殘きがし

など、思ひぬまふるも、ようなきわざり、たましく萬法不可得
のをしへとうけながら、名聞の爲ふ又さらふ、魔民となるべしや
は、能因が歌巻を土の中ふ埋めたる、また西行のこころふまかせ
て、よみをしてしなど、さる人の、無着の本性おもひやらきて、こ
ころふくし、ぬくて、おのきお年頃、よみちらしたる歌どもと、
殊更よ、しるはといなかりしがども、いつしが積りて、ひと巻よ
みちぬ、ひとり燈火のもどふうちひろげつゝ、見もてゆくふ、入
江れかれあし下折はさらふもいたず、先何事をよめるよかと、み
づから打たぬおるよも、少いらだ、こい、さまぬへたる陀羅尼
あ、など我ながら、いさあさまうて、ぬみふく、ひらきーこと

おげさむき北野のみやのうす月夜をとむやうめのよやひあふらむ

二月たより餘満る伊勢れ國へ出たつ列ふ

つためとら来あくあさける露なほら手折るもあさし軒のどやなき

岡 落 花

きよす啼くさあへれたあめ春れ雪おのみふいひてたれふらすらむ

春 興

笛の音ふ梅ちるごとのゆふつく夜がほみどわけさうさやとこまし

白

しもさやくあーれ穂のへよ川つらの月もいもみて夜はあけふけり

暮 春

まのひても見ゆるたよりや春ならん花よりのちれやまのたのくも

雨 中 苗 代

さきそめしくろの露草つゆ見えてあいろ小田ふたさめをふ

暮 春 霞

やま松を花よりれちのよはふふてのしるもうすきあふあすみりあ

安 倍 仲 麻 呂

あえれあご月もあならておほきみのみあさの山を志れたさりけむ

首 夏 蝶

とふてふの夢乃あふくあはせふあは羽袖もあほおもけみり

五 月 雨

めでたし
日本史の論
など併せ見
るべし

池の面ふやしくまきしたちと葉もさうよきつみてとみたれをふ

山 家

此みぬれハ今たたおあし世のなむ山のいつあよのかれえてま

夏 戀

いもあつむがらくれなぬの花はつゆをれのこ袖よかけむとや見し

あふこと夏乃大野よふは鹿のねよもあきあしぬとあおひあ

氷 室

ひむろやま松ゆせをえてうくひさのこ思も時めくあさならけいな

燕

うちなひさくるよこのもの柳をらあすまよあさてつためとふあり

海 上 霞

さくら見ひろふどとめられたもよりなみの五百重もあすむ春のあ

蓮 始 開

たあえちす今さく見れば池のおもよきつくあは日も影もさくなり

朝 納 涼

蚊のこゑもよまけよなひくあさりけよ小簾の内外ハ秋そつてぬ

雪のふりけるあし

うせとえし門の松の木おのきのこあしりけふる今朝のあきりあ

折 梅

小籠よはいまそとしまし梅れたあうくひななはいとられましやい

暮 秋 露

あきかき野寺のいけのられたちすたるあけ露のほりところや

朝 貌

うけきゆくありあけの月れ影とめて今はとまくのあきかきのたあ

八月軒葛室の主り身まうりけつと悼とて

とはふれとほりしとあけのみあきかきの世ぞもつたてとあきか
千せあけてたのとしものぞ葛あつら時雨もまらてあけよけのあき

夕 貌

みる月のまゆねのあふくれそめて軒のゆふあつゆにあふなり

小 鷹 狩

小鷹入とけ入る野邊のあきつと夜いとまきてなごのよりの来ぬらむ

海 上 秋 望

あきつ海のさ霧ましろよあき日としとそらようあふ沖つこまやま

けそつ文賣のあきふ

あきあけし梅れと枝のたまつとやうくひすことあふなるらむ

初 冬

あきのことるまあきの菊れ霜のうへに朝日あきりてあきに来よけり

霜月たあり加茂の野よと

日影とすあきらたちとる霜とけてあきあきあきあきあきあきあきあき

同一頂其あとのの籠を見て

たきのうへの杉のむらたち月おちてくもぬふらどる水けふりのあ
年の始ふ和歌の浦ふて

みたらしふまつくわさ日のうすにふひ氷のそともえると見えびる
氷

あせさゆるゆふ川よとのうたこなり入日どさへふむとひとあつし
夕 鶯

ねくらどふそのううくひすまはしまて花ふ八月ゆいまにふはまし
暮 春 雨

うらみつるばらしも空ふやうたえて花のあとさふゆふくれのあめ
春 曙

あめめやるおほろつく夜の名残さへつゆけきたるの春はあげの
弓

きいしよとひふあきともおるきみれまけのまよきのきとらまー
山 家 花

やま櫻ちりなむ後いさもあらはわれさきぬやとたふ入のさへいし
依 花 客 来

あひよあひて人も来ふけり初さくらまたはくもあらぬ花の夕くれ
羈 中 花

あつふのちどりもこしよちまりおむむ花の主もおもひりさあ
閑 庭 落 花

きえねたよとれいろと見む入たよもならしは庭のたをのしらゆき
山 家 月

いはそよく軒のたるこの音すこてやまきつひなる夜は乃つきあふ
秋の夕妹背とたりよて

嶋かけやゆふぬせとふはしのたのそよ山のたふ月はいてふけり
八月たがり丁法寺よまふてよ

ながあきのこつ穂のたま田色つきてと入とよむうたけとらよ
暎 志 蓋

いひり網たやときたなてつよみあくぬ乃岸のへふふぬりえつこ
掉 梅 蓋

ともけきハ在ふこよろの駒はるきとぬとむちもどりたあつこ
田 家 月

ほあまよる田面のまりのたを間よりつゆぞつくしてをある月かな
水 邊 菊

おけにるふ汀のきくのつゆのまはそこのさよきもいはどなるらむ
とらよどのいらさよ小川のあきの水きくの香きよとらくむ花ひしつ

九月たがり我師日高の郡ふ物し給ふ列れふ
ますらとを引えあつてふぬふら坂きりふむららぬとみわをれそ

同じ頃大凝上人京へ物せらるゝ列れふ
やあきちる淀の川風身ふしめてふみのりとらむゆふとぞそおもふ

同一時菊の花ふそへて

とぬれていゝるゑら菊の露のまゝまたれやせまし千世のおもひふ
覺靜師の日吉山へ物とる別きふ

きらゝ坂きらめくかしのむけとめてのなりまはらむ道やとやけき
月 前 紅 葉

秋やま乃ことを忍乃ゆふ日いつしぬと月ふなりてもくれのこりはし
早 春 月

とゆきちる松のうゝ葉の夜はの月ぬはむと見ゝはゆふへありけり
残 雪

ひまとめて若菜もはまむあさほく日さけや春野のゆきのむらさえ

若 草

うくひすの羽ふきふきさゝへは雪れ名残つゆけきんこのいらつゝあ
雲 雀

うらゝとほけゆく空のいつこまてううれて上るひたりみるらむ
三月たうり糸我山ふて

糸我山よるさへうけてえあハ見むなりきたる日もくれそめよけり
彌生たありゆる山里ふ物とる路よて

苔のうへよおつゝつたきの音とれとまぐものほして行く山路ぬな
雨 後 花

きゝはなぐつとやまうとま雨すきてつゆけき花ふゆふ日さけなり

羈 中 花

いそぐは明日のさおりも見てまじと旅路なりけりやまごくら花
落 花

あらみゆくはらしのを忘れあり明よほまきる雪いそぐらなりけり
春 山

とりよろふ天のかくやまやのくくと雲のたたてみかほむたるあな
葵

つゆならりとりてあさよむあふひ草きよきあしるを神の志るへく
蚊 達 火

あまの原おろふたよりれけふりよの月おとこのむ夜いのひやりい

夏 月 明

ゆふたちの名残つゆけきさよれたのさやあゆすめる月のあけあふ
夕 暁

けふもまにあめこそふらねたとし神をらとのめふる音のみよして
八重一重雲れころもいあさねてもそよしきものあゆふたちのそら
月

あふあとおとふく月を惜むらむうしと見え世のあけふやいあらぬ
野 外 鹿

つばおちしあきけ末野のあきさきりふむするしれゆく鹿のことあな
野 外 菊

つたさかきの大野はまきの花はつれ手ども千世のまねに

時 雨

紅葉もるはらしの庭のゆふつく日ひとくきして今日もくれけり

歳 暮

ちりつともよとの机れしまのけいこーかゝぶのんなりおけのさ

戀

まはらばと思へる我もまはらばけりさめたのりなるこひのちあはれ

憑 偽 戀

志らくもの道ゆく雁れそら音とゝ志らくらん夜はなめあはれし

憑 株 戀

めでたし

たふあいにひらひらてまじらふこの思ひもつくる入傳もあな

松

ゆくとあはれをらむひとつ的小松原千代のまきりやらつこあはれむ

五 十 鈴 川

ながれあしい長よの川乃いよしへいこのみあゆみ乃神をしるらむ

草 庵

山邊ふや野邊よやいねりしめてま一月とたあさどよーるひとにして

詠 史

ふちこまひ耳ふりたてしきくものどうたて御言もあはれしつらあ

夕 顔 君

舞あはらどりてかへしゆふゆやの花やたのむきしるゝなりけむ

壽雲女院

うき^そものそてふつゝめるうき事ハ人こそ一らねきえむ世もなし

螢兵部卿宮

とけのうちよはあつ螢のひかりより思ひもゆへきかけを見をめし

寄菊哀傷

君のためうゑ一千とせのまくのたああたれ手向にぞらむとや見

冬哀傷

ちりまよふ紅葉の色やうつるへきみことふあいる此みそめのそて

春のあした庵ふて

わろくとまきみ花ちるあさあめふまめりて寒しうくひすのこゑ

夕落花

風とらへいやはあきよさへよたえたてし此ゆふへも花のちるらむ

幽栖春雨

とが門の樟のふる葉のうすもみち今日もこねれてたるさめそふ

瞿麥

くさふがた霜よとくたふわるものとおく露しけへなてしこのたを

海上月

時しもあれへるみつ真玉おもねえてまたのまあかゆ月たちのねる

日吉の山へ登るとて

おろひえのやましたとよみゆく水いたがねの杉のまつくなりけり
うちぬすむひえのたぬねのくぬ木原ふる葉としけみ雪そのこきり

二月の末ついでこの木のめ峠とこゆとて

あざくまのうつろをらしてあとなぬり山路の雪いとけそめにけり
あざなくなつる少女の黒ぬみもまらもてゆへる山のおくがみ
同くとひみて

さとしほしぬすめる月をまくらみてこよひハ花のぬけぬねてまー

正月のたじめ日吉の山より坂本の里ふ物して

えらひはよいてこしそてのしらゆたハ小雨ふなりぬ坂もとのこと

同じ頂朝まだたより京ふ物せむとてとたりある道のほ

とりこよかして打とせせば山たあ岩倉花園などれ里々

山あひつらなきり雪いとおもしろうふりぬ

あらはなくとやまれ月のかけなあらゑらむり雪れたなそのよさと

無動寺にありけるころ折ふふれてよみし歌とも

ぬけうとき檜原のおくの山まりにむせふもあはれうくひすのこと
老しらぬまつよりおくの谷の戸はさまりとのまて今日もくらしつ
ほり井くむと谷のりすまくれそめて苔のたもとにつきそにやへる
いとをなはこをきるゆきもどけそめてたふのをちこち驚のみく
むらつどのいらたのまてくらしきぬらし雲よりおくのくもを色ある
うくひすのこと急よりたれし朝霧のまこりもにほふたあの一いつく

いと
たくみなり

みこぶらゝのきたの苔もよよほふ谷間のいやはなのつゆけを
やまゆつら杉苗うよるたもとよりまらくもたちてほどよきすまふ
えつらりの堅田はなひくこゑふけて波の穂しろあきの夜のつき
こけのうへふ紅葉あつちる山てらけ秋のゆふへをたれふ見せまし
むらつちの秋のしら雪うちあすみ日あけのころよふゆい来よけり
すくひすの今日れたはねをこよみみて谷間の松もひきそとあへぬ

五月の末えあり無動寺れ明王堂ふ參籠とる行者あり北

嶺當行滿の人みりけり朝な夕な行ひの鈴の音などさや

さやとあよひ来ていと尊くおぼえ侍りけれハ

朝まらぎらとりおこなふ鈴の音ふよそのねきめもいふたさやけき

いほれの年ふあありけむ文月の十まり九日の朝まだき

より都みてたゝみらぬこと出来ぬとて立并べる家のこ

ころこより火起りて限りなき家ども見るく火の穂

れ山となりぬ佛經ふ三界火宅とよき給へるもたよまの

あこりのさまなりけりあるあ

むらあれるけふりの底ふさまよひてらくその人ぬなきとけふらむ
ゆふ日てる山と見えし何あしのみてらやと火のあふりありあり
月影もぬらくれなぬよぬよきて火の穂みからふしらむをらぬな
あめはちをこかに火影によるひるのさあひも知らて幾日へぬらむ
あまの原おほふけふりよみつうとや墨をあおせるいろよみりつ

同じ時根本中堂のみいへの助咒ふまありて

れこふひのあふれまゝ水雨となりて火の纏れ宿よそよげこそ思ふ

無動寺ふて九月たかり

さとしぬのつまゝきかねてなく齋ふあへんを山いもみちしふける

千鳥

海人の子の海苔とる袖のみきひたりなくねこぼるゝ嶋ちとりがな

折よふれたる

我のこ乃春のまうけよさしすてしめめのやあきもいろはをひつゝ
こなりつゝ算はいまよとれとせねと世いえるをらしうめのふよめる

安田正路が本居豊頼ふ従ひて京へ出たちける時その道

とがらの名所とよめる中二高師

昔よきくたまの高師ハ益荒雄がとてむらここの名ふこそありけれ

住吉

よる浪のたやたちがへき住の江やまつらひさくおゆるあへしも

大江岸

月かほむ大江のきし乃やなきのあふるのりせむとひとととよめる

三津浦

ゆふしほのみ津れ浦ととくふねのほのかよ見ゆる淡路しちやま

自在庵ふて熊路花

小原女の手折る山路のさくらを明日ハこやこのたふふあふらむ

とりあふれたる

あけしつゝたるの山川せをたやと風もふきあへはちるさくらかな
とくちりてあゆるゝたあや芳野川とつよりきよきこゝろなるらむ
やまふきのたなの八重垣つまこめにとあつくりけむ川をひのやと
よとみあきたるのゆくせよさそたれてかけとし花も涙のうたがた
つきあすむ梅のたやしのためるの雪わいゝしくもちるゆふゝあ
ねとよきすそゝや初音と小藤まけハ外山のまが葉あきあせそふく
かせのよふらさゝ小川の水きよとあゝとせふとやたなのちるらむ
あやりたゝけふりのと忽にやま見えていさよひのゆる夏の夜れ月
うゑたてし小田の早苗れ今朝の露うひくゝさくもすありそあつゝ

みよはなくりハとれときの門すゝみ風まつ袖ふ月も出ふけり
月もいま尾の上たなれてひとこゑの名残さやけきそとよきけりみ
なれさりよ誰りとふらむ今いたゝ世になひあゝれやなきあくれと
たぬむらほこもりもはてぬうくひすの花はいうとさきこゑも一ふし
たあどりの名残たうなまなりむれいむなゝきそらに春もいぬあり
花をみれましたるむらふひあさりしあきねの小草まけりのこして
うふはなの森の馬場いさこの子あゆふはゝみとるごころなりけり
ひるあやのたみさく川へくまをなまてる日ましろみ水そあけける
青葉山あきのもみちのしたそめふてる日れあけやまつごころらむ
えちと葉のあめのなこりもこゝちよしいと池殿ふゆふとよみせむ

蓮

市杵嶋姫命
あわれとや
まこしめせ
らむ

池の上についてく女神もおもひけようのへてとけるたふたちすのな
とりとれいひとこそいつきたちとたの露のま玉もぬきやとめまし

水 邊 雁

こつきよき澤へのきりのひまとめて月よりつきよかつるありあね

秋の野に鹿ひとつたり

野つよさの芝生のつゆよふくまひてとてるさと鹿はいれつまなし

夕 雁

さるとるに岡への里のゆふらせふ日影うけきて鷹あきまるとる

暮 秋

ゆふあけあみあきまきのころのな花の露よりなるきあきのいらあみ
菊とひとてるしらきくなれのとどろくみあふもくるとあきあみ

秋 木

かいつなく大川のへれあきあせよ今日もこひしくちるやあきあみ

残 菊

あねのころ枯生れ庭のきくのたふまもよりさむき香こそあねへれ

和歌祭のねり物をよみける中よかる

あろあけて濱路ねり行くものよふもあふまやとらむ浪たよぬ世と

秋つきたる菊

いさ今日ハ舞とうたひみくらしてむ老をなげくもどりほことよれ

頬高く鼻ひくき女

杖ひきてむきくろむきあことよハむるよとたありふるむいなあ妻

みぬさ

さよがもつ神のみぬさのおひひせふらとよすよきさみの袖ひな

雑賀ととり

さよらあみ八重折りあへは浦風ふとたれぬるしとどかーありけり

春のはしめこよちそこあひて打ふしける

春煎る湯の氣あはめりたれこめし小簾のうちにもはるや来ぬらむ

早梅

来むえるのこよみうらむとよふ春は門へのうめもたあもよひして

木枯女

ほえれその琴とりさして小簾まうはいかみおもなき月夜ならまし

ひるくひ女

かれぬへきちきりおもたてませの内はひたすらふるふ晝びるの花

朧月夜

とりぬへーあふきのつまよおもひきや須磨の浦風ともるへしどハ

玉ぬつら

ゆふのほの露れあこりもあひあくよ色あへあわれなてしあのはな

紫式部

玉ひたれ雪よかよけ一跡もあれとめくりあひけむ月とこそおもふ

月 前 蟲

むしのぬい月よりたぬききこゆなり夜やふけぬらむるをちふの宿

山 落 葉

真神なく戸かくしやまの山おろしふみら雪ましり木の葉さきさる

冬のたした庵よて

落葉せしまごの木末よこのあさけゆきれたひねを見そめつるひみ

冬 里

あむつさ日かけひこてたちをあれ木の實たてふ山南のさと

釋 教

あしたらと終のとまりとひむひしふめくりそめけむ法のみふねは

高野 大 師

たが野やまかくの岩塗さりたれてもちの夜ちかくつまやとむらむ

慈 覺 大 師

みふねもる西さかもとの神ひせふたふりもあへはなまやくたけし

慈 慧 大 師

木からしのみみみよりふくこゑたえて日かけ春めく雲のうへあ

相 應 和 尚

染殿のたなのへ重霧をらひおきてうへり見せせはゆくあらしのみ

柿 本 僧 正

茶殿ふとしくもそめしころあむ君さうこめぬほとけとおもふは

慧心僧都

すみまるとる横川のおくのつぎうけふ終のゆくせやちきりおまけん

僧賀上人

名をおもふうき世の人ふくらふれい君いものふもくふいりけり

性空上人

もし不やくひろのまよりゆくりあく思ひこひれし君を見るかま

僧生遍略

天津日れうとみの谷よきえしよりあけのたもとそひいんまよなき

素性法師

法の師の子ふふといしきつしれきぬ君もたごといおもひたちけめ

文覚上人

かやたきの岩うつ浪ふいくをたひうきてはまつむあらみとまそも

法然上人

くろたにのとけのし水ふやどりけりまどりふひりるあり明のつき

日蓮上人

あさ日さけ伊豆の海つら霧たきてうき世よふふたふたちすひな

親鸞上人

いさ子ともうれしとたふもかもひあを西の御國れたるい見せなむ

山王院大師 智證

大日吉や小日吉のおくの岩間よりなふれてきよし三井のましまつ

巴女

祇王

小會

静女

たむろく女

賛わかく
そめる入る

まことつみはなごゑなふれゝあさ日子のふけもやとせゝ木曾の山水

なるくゝよふとけにほいぬ身なりせい浮世のさおも思ひしらゝと

ことの音の夜きりふえぬ宿とめて月のそらよりまつおせそふく

鶯の岡おもふそらふも飛ひらねてうちふるそとのうらめしの身や

昆のここそ花よいたつれ太刀とらば城さゝ國さゝのさよあけてまゝ

藤房卿

夏うけてたのみしものを木ぶくれはなとなりたてゝふちれば花ふき

楊貴妃

青柳のひとともあふくものうへれ花かみふるらいろなありけり

陶淵明をなむる長歌

歸りあむ去来歸りなむ故郷のミツれ小道の菊れ花今あさくらむ松
の木もあみさひぬらむ歸りなむらさひのりなむ我が子らもととや
まつらむそれたよもととやこふらむらさしこめ穢き子らに猪自物
膝折伏てひとけらよ媚つゝあらけいぬよふれる官を休めて故郷へ
らむのゝらむと益荒雄の高き心を腰にかけまほよもあけてはるゝ

よふ歸り来ふけむ其人の心ともも玉くけ二人の君ふ又更ふ仕
へさりけむ其人の心とももあはれくことしおもへいみくハし
く高き心ハ故郷のたきの小道に生たてる松もしあめや菊もあめ
や

玉津島に月を賞づる文

天飛や鴻の翅よとりぬくどふ、文月の望れ夕、衣手の真じか
け浦、夜光よ玉津嶋山に登りて、峯の臺ふ我人圓居す、淡路
嶋のたと打たせば、入日は潮路と焦して、眉引の愛媛の御
面、雲の旗手ふたたび、天津水影押伏せて、直見る海原ハ、
夕潮平よ満足らひて、波の上静ふなりぬ、待ふとあまらくも

あらで、我心名草の山ゆ、月朗々と立昇せば、山ハいよ青
く、海はいよ廣し、漕たむ小舟、跡いちあろくして、小良
形、錦をたつお如く、澳つ風浪の秀よ渡りてハ、眼あよやく
黄金を散にふ似たり、あなまやけ、あな面白、是ぞ天雲の退
への極み見夜けつよ、人々ふ語りひけらく、そもく、是の
世にある、有りとある解り、何ふは常あるものハあらむ、さ
ると、千年の後に到るまで、いひ續き、語りつき来て、打語
し見れば、其時のさよも、まのあたりうあび出るものハ、た
だこれ、いふしへの高き言の葉なりけり、おれ、行幸の愛た
きあとも、玉津嶋山高きしらべに願えて、蘆邊の鶴がね、た

づくしあらき、ぬれば、今此月の光りみ競ひて、はえあ
る、言葉の花こそはば、らめても、今宵の樂みと終へむ、
いふせび、月の光りをとへむ、いらら、いふとらふふ、一
人が答へけらく、げよ、今宵の月は、年頃の光りなるぞ、さ
てやとなむハ、月人のおもたむ程も、やさし、さハ、とく、
みましより打出よ、罰ハ金谷のなど、ざれつゝいふ故、盃と
あげて歌ひらく

此酒や何處の酒手束弓伊丹の酒此月や誰世の月玉幸ふ神代の月々
夜よし夜よしといひて徒然よみるめや居らむ酒吞はさのしらせは

とひたふるよ酔てや居らむ思ふとち圓居る夜ハ唐錦たよまくと
しといふしへの人も歌へり望月のてらさむ限り諸共に酒みつき
てたぬいささつくしてあはれく是の月夜の左日鹿野の有
穢の穢の常滑の常夜に照らせむの見ゆる阿波の島廻の山眉ふるむ
たふきをね是の月夜ハ

詠寄弓祝歌并反歌

めでたし
大御世ハ安し豊けく初春いたぬしのごさし酒飲て遊へ諸々琴とり
てうたへもろく小竹の葉のそよやとたよも群鳥の争ふへしやし
かひに是の真弓ハ大八洲國の鎮めを物部の家の寶を初春いたぬ
しぬりとも大御世ハ安けむりとも大丈夫か真弓にかへてさふしと

と琴やいひかむいたつらよ酒茶のみとと梓弓由たらふり起し其弓
よかくる弓弦のゆつりあひて射たふつ見れハ初春の此あらそひハ
雄やしめてとし

反歌

まはらとり手力こめてひく弓のもちたらひとる御世の春も

毛詩采芣芣の心とよめる歌

都也打出て見きた春日れむとあれ小野ふなゆ竹のとをよる子ら
白袴の衣のつまをつまどりて大たことりどるつまたさみこよと采
りどるうまし春を大御世のたると

詠草蟲篇意歌一首并反歌

岩をしる垂水の上れ葎あそもえも出つとへ霜結ふ淺茅の原の蟲と
そいねよそなくとへ天皇の詔命あしこみ天離る夷の國へよはるは
ろふ行てし君あがへるての歸りまさねは晝ハもねよみき暮よる
ハも思ひもえつよ我さへよ早葎の如やく虫の如や

反歌

君あ爲ぬひおける衣れあかせ衣うらさふしもよ歸りまさねは

擬甘棠篇

めでたし
みえぬれえしぬの山の久堅の雲井櫻いめてとくもたてる櫻り五
百とせの昔思へハかしときや和期天皇の大御輩よせし櫻を大御歌
よましし花を其花を人あ汚しを其枝を人あ手折りをあハれ此うま

し櫻よみしめさへ引えへましを御垣をいつくりてまゝを此櫻いや

西行上人の像の前より申す辨言

慶應四年二月望れ日羅窓のなるし

上人の魂祭せられし時のことみなむ

これの上人をや、めでたくも、世と量り給へるのみ、いとくも、世を捨て給へるのみ、あつばあり、しる捨て給ひしゆ、天の下、國といふ國はしも、難波瀉、若のよき葉ふ、風ふきとることの如く、芳野山、櫻が枝よ、雪ちりおとるとの如く、彌みだれふ亂れ、いやさやきふさやく世となりぬ、さると、上人ハ此みだり世の道ふみらへて、まやくまくの山

路に花をたづね、無爲の里をよ月と詠めて、平らに安らびに世を過さまじし、いとくめでとき例ふなりけり、故に世とをありしハ、騰馬の嶽の雲をほぜりて、秋篠の時雨を志せらるが如く、又家と捨られし時鳥の高き峯より出て、おのがまふく飛翔るふ似たり、あまきは、上人のめでときハ、家を捨るが、いとくきふり、家を捨るがいとくきた、時と量るのめでときあり、めでたくも量り給へるのみ、いとくも捨て給へるのみ、こゝろハ、はしたての倉田の大人、ことし二月に望れ日ふ、人々をつとへて、上人の靈祭は、さると、この上人の世を捨らまじし、陶靖節の歸去來ふ似たるを、むかし

めでたし

み給へるお故なり、おのきこれと感けて、歌ひけらく

二月のこれの空よつたくらめいむれ来ぬれハ天つ雁啼てそ歸る
世の中いづくことあるらし古を志あふれこそ咲みほふ菊の籬よ
影面の山を見さけ一漢國のそれの翁ハ亂るへき世を量りて住捨
し家は歸らひ夕月夜鳴たつ澤ふ行ひの心をまじし我邦の是の聖ハ
なれゆあむ時と曉りて住馴し家を出ぬれなれく是の二人ハ國
さかり世さへなれとおのつから魂あひけらし志がたが歸りし
雙ハうなむ子も其子の母も諸共よみつさひよりて慰もるすへも何
り一とあなほいれおれの聖の世を捨しこと悲しと紫のよほへる
妹ハみきりより泣てとむれと白玉のうま子供ハ左より泣てとが

陶淵明歸田

園居詩云

羈鳥戀舊林

池魚思故園

云々

れと妻も子も何そハ露と淡雪の蹴たらしけし池水に潜める魚の海
原ふ出るり如く籠の中ふこめれる鳥の大空よ翔らふなしてうら清
く出し君りもいとしくも捨し君も世の中を捨よし時由國といふ
國のことぐ東ふ西ふ遊ひて安らけく世さへ終ふきあはれ此清き
心ハ菊摘し雙も志りめや二月の望の今夜ハ其人の過ふし時と櫻花
折て手向てまぬひつるりも

同じ時山家集の詞書どとり出て人々歌よみけるおのれハ後の世
の事思ひしりたる人のもどへといふとどりぬ
なりむらむそのやまのはよむむ月のゆくへや君のゆくへなむら

時鳥の詞

春されの先なく鳥と、名おふ鳥れめでたきはさるものよと、そ
が養へる子の、契りこそとびしけれ、あがれる世の歌ふい、思ひ
おどしてよめりしならねど、醜子規、又きけばくるものなどの、
歌もとめると、今の都とありて、宿世の幸もやうくおめぐり来
ぬらむと、祭り近うなりぬるなど、若公達女房などの、とまきこ
しき際い、こそお初齋聞むとて、いちとやくも北山とたりお車引
おせたる、まいて居ながらまつほりのとまは、心ばえ淺あらぬ
女の契り一人と、こひととるお如くおむ見ゆる、抑えじめの程ハ
世のおぼえいと花やおなりしも、物びり星うつるまよふ、いつ
しうそうぐしく成行めると、なべて世のならひみるなど、今ハそ

のうらうへみる契おそめてとけれなど、橋ごつ折しもあまき、窓の
若竹よ夕風さと吹ととりて、るとよきほど、一齋高う名のりとも、
手よもとるばかりにこそおぼえしよ

なうぬき物

めでたし

霞おくまよ琴の音ののめいたる、物見車、よき人の筆の跡ハ世
よなき人のい、まいてなうぬし、初春こそまきてなうぬしけき、
花鳥のおのうぬらなるおやひいさるものみて、いと清らにそうぞ
きたるうなるおもの、ひふどりてあをびたるお、其おたへより少
しあらまやうづきたる子の、いと白やびなる小指をおめて、十
二十三十四など、おまおとふとも、伊豫の湯げたもとどく

しるまじうこそ見ゆれ、又隣の高樓には、へむつきなどして遊
ぶめるふ、得つるぬ人やありけむ、若き女とどのを、めき咲ふと
忍、柳をへだて、打聞えたる、さへ常ふい歌よまぬ人の、試筆の
料ふとていとことやうなるを、ものみあらしにして、こいさろ
かめりなど、うちとろきたるも、折むられ心ばえいとあうあし

遠くて近きものは

いとめでたし
旅寝の夢み故郷を見たる、佛のさちの境界、唐崎は名こそことご
としのきど、京よりは、一日の中みゆまひひたべくなむ、心あひ
たる速方人、こがらしの瘠いと寒きあした、半露のものとより打
たはふ、たうなる高根の雪と積きて垣の梢も顯きたる、あう

らうあれば、いと氣近うぞ覺ゆるや、在果ぬ命まつまことを猶遠る
るもの、まぢあけれ、五十ばかりよて終らむい世の常なれど、無
常迅速のならひ、さしも定まらねば、猶後の世れ心おげこそ常よ
あらまねしけれ、こはまのあたり、たれもくゝありていあれど、
猶博識の學匠などを、よきせきはかひ誤るべしよ

名のめでたき處

山はびぐ山敷火山、足柄山もよし、川は木の川有栢川輝の小川、
長明入道の加茂社の縁起を引れしふることさへおもひ出られて、
いと愛たし、里ハ更科大原の里しおらきも又愛たし、寺ハ高野小
初瀬三井のふる寺、平等院法性寺など、唐よみなるも古き際ハよ

くからき、井ハ明日香井、田井、榎の葉井、野ハ嵯峨こそりきて
めでたげき、原ハ那須の小竹原、あられたばしるとよまれたるけ
よや、身れ毛いよだちて聞ゆ、菅原園原、道ハ藤の細道千代の故
道、綾の小路三條五條をよし、一條より九條まで皆めでたし、と
べて社も伽藍も野邊山川、いづれもく都のはいみじうめでたき
限りになむ、寺ハ日吉の古寺、えいざむなどいれむ。いとなう
あしげなし、こハ先よりいじるすべありしと、ふと打すすれて

九月たのり慈灌上人日吉の山へ物せられける時

たのりたや尊きあも、ざりたやめでたきあも、あをやつばらふは
阿遮梨夜とたしつて、もろくのたためよ、教授の善知識といつあ

きつし、法の大略のよとがと開きて、直ふむぬひとく進むへき業
と一青柳のぬもごろふいとしむよよりて、諸越の言よハことば正
行とたしへ、または軌範とあかまふてへり、あふ慈灌法印、其
業の御よとしごと蒙り給ふとて、今此九月はあり初霜の置まよふ
朝けふ、諸の阿夷恬とほととひつし、赤根刺日枝の御山へ参昇ら
せ給ふなむ、いとしともいとしき極まよたありける、いとや横川
の真し水、清らふとつていこたたくの青人草よそよき、三谷の
燈、さやあふりよけていぬば玉の闇の長夜とてらしまはらむ、ら
あし御法のあやふ奇しき限りは、そのの御山よ隠りまは、御祖と
そハあしらめ、神こそハしらめ

昇りよちふよけまゆらむともし火の光りみえり我身はあはれ
秋の夕野べと見渡して

牽牛花とお
り乃ひふき
と乃ことと
りあるへき
にや

真秋の照日の光りに、上なきいろのふるひあへるゆめでたひれど、
夕さりののりに露ひけて、枝重げなるさま、いひしらざることなづ
ひしけれ、女郎花藤袴きちゆう撫子尾花のたぐひ、朝目よく打見
とらむを、なまめらしけれと猶夕暮あむ見處多ある、朝のほこそ
いそが名もえりく、明あたと置いていふふことかたくもあらめ、さ
れど萬葉集よの夕蔭ふこそ咲まざりけれとあれば、これさへ夕の
垣内と出だなむ、さ、秋はゆふべとこそおもゆるゆれ、この八千草
の真盛りある野原と見渡しつゝ夕暮深くなるまよ、と霧うちな

ひきて、濃き露き色どもの見るくおぼづあなうなりもてゆけ
ば、今しはとながめ替たる昔しもあれ、いざよひの月、ありく
とさし昇りて、よるの錦もあましくこそ見ゆれ

草庵菊と必題ふて

いとめで
伴菊の菊の
説併せ見る
べし

隠送あるものと菊ふいへきと、今の世よもてをやすめるた、ら
とことやうふことを見ゆれ、こおねえろぬあけむらとまき、色てふ
色の限りと、さへもええくしう生したてたさま、いときらび
あけて、まほふは打向ふべくもあらき、牡丹のさるふたの性得と
あるも、今いたゝ二の町ほど見ゆる、世よ寒げなるわたりのい、
さるめでとまにえあらで、こころ生ひなると野べよりうつせるな

めてさし
此法師此夜
此舟に乗る

りけり、重陽のせく三日五日など打過るるど、拂ひもやらぬ前敷
に、朝霜けやけう置ととりたるふ、霜さひたる花のかほして、とな
なきたてるこそをあしけれ、あなさむや、衣一ッたべあどいたま
ほしげふる、いふふもまごりていみじうごあし、ませまほしけれ
ど、昔の衣のた、一重なるどらふといせむ、さは杖ありてつあせて
む、いざとりこそなど、つぶやがるよもはたごあし、あられ世にそ
まぬ花とい、あうる様ぞいふらむ、あなごあしの本性や此花

淀の川舟の記

都に物せむとて故郷を立出し、長月の中れ五日もあはち昨日は
曉なりしと、此夕なむとやう難波ふ着きたる、今宵八月見つゝ舟

て此文をか
かざらば此
變化のさま
はやうく
に世に知ら
ずなりぬべ
しとくも
傳へる物
語りな

より行くなめれば、人も我もいと興あることちす、湯あみし夕け
こうべなどとするどは、はまし檜割籠など携へ来て、やよ客人
よ、今ハ夜寒の秋なるは、舟ハ寢覺もとびしあらむ、こそもて御
心慰めてよ、さは疾く行てとく歸らせ給へ、日をぬぞへつゝ待ち
てとあらむなど、口よりすべり出るまゝに、ひとものさへうら、
火ともし頂になりぬるるど、此家の、ととなあるや、打したぶき
つゝ唐紙の障子を細目に、とと押開きてこは、客人達待とびてこ
そかはすらめ、舟ははやとよのひぬいざ給へ、しるべ申さむとい
ふは、そおまゝ出たつ、川は名ふかふ難波の大川、水の白浪など
のこねくと瀬杭打てながる、さま、けふ大あたの川てふ川の、

太郎がねどこをばおもゆるれ、岸ふつらなきる高樓は燈のひげき
らめきりたりて、星の限りを集へたるおごごく、水に跨る大橋
はいや速長ふ横なりふして、千筋の虹をまよせざるよ似たり、民の
おまどい、など打ちむしつゝ、そこら見渡するどよ、舟いむやひ
とときてやうくふ漕出きは、月影水上ふいどよふ、すみ
渡るふれ高樓の物の音よきと入れてこそ月い出よけれ

この川舟のおまどいお業とをめづらかなれ、十人ばかり舟ばよに
居るらびつゝ、海老などいふめるものゝ腰つきして、足并なよめ
ふ漕きつれとる、あなほおふやと胸づふれておぼゆるふ、来よと
いらいどゆるきめや、佐渡い四十九里波の上、などさりげなう、

うとひつれたるこそとりのくめつらかなれ、鳥多く森口のま
りからつゝお通て、堤よさしらのよるどよ、おこどもひとしうお
り立て、綱さしまたして引登るめり、ふるき障子の繪などよ此ほ
たりのけしきとて、昔間おぐきよ笠ばかり見えたるおありしと、
けふまのあたりれさまなりけり 月に引く小舟のつゐてよを
めにくるしき業と見えぬなりけり

真夜中と月影白う澄またりて、川風いと肌寒し、けふはまし
おらへりしことと等閑よいあらざりけりといふつゝ、いよのけきは、
刺籠どう出てくふ、舟い平かたよ至りぬ、おゆるをどに棚なし小
舟にのりて、こなたとさして来る者あり、昔のひまより、とと月

影にすゝし見れば、こはそも何と、波舊苔の鬢を洗ふ、なごうた
ひもしつべきへむぐゑなりけり、猶其さまを見るふ、つらいと赤
やうよ、鼻空さまに打向ひて、文珠善さちの乗物めきたるお、身
ふいほらめなとつゝき衣を裾短う打まどひて、腰には繩の帯ひ
きゑめたり、こたや百鬼夜行のたぐひにあらざい、羅生門の餘黨
ふこそい、などいとおぞましけきは、や上隣の旅人とか其子とひ
くせがし、ようせきはとられやせむ、そよ其都人をや引かつき給
つゝあし、鬼一口よくひもぞする、などさへいとまほし、見るく
舟漕よせて、ふき廻てふものを我舟ばたよるむ打ふけたる、あな
やとばありうづふしたる程ふ、苦荒らふよかまわけつゝ、牛の如

き齋ふり志ほりて、こたや此舟の奴原とく目覺してくらへく、餅
ふまれ酒ふまきくらゝいぎや、生としいけるものゝ食物を見つゝし
りつゝ、猶ぬるよしのあるべしや、それとこの尼おしこの法師も
くらゝいぎや、旅にこあきは鮮らゝみるものもけしうはあらじ、我
ゆるしてむくらゝあし、などいときたあげにいひそしたり、あひ
れ此さま清少納言などみ見せましむば、いゝなるものゝ例ふお引
出なまし、まがうしろの方ふうまいせし人も目や覺ぬらむ、やと
ら旅袋に手あぐひと入きつゝ、青ざしとう出てゐひなどする
と、何ふおあるらむとすかし見るふ、牛のまりつぐねたらむやう
よ、いと黒やあるる物を三ッ五ッばかり、竹の串たてしたるお

りけり、さて其人　もちひうる齋み寝覺てあるむれば苦もる月
の影をめぐまゐる、など獨ごちとるものあたりのさまゐるとよりし
りければ、おのれも　もちひうる齋といふらば自ら眞言いた
くも胸をつふしつるあな　ひよる程よ、へよりともよりも、
ほいとよしげに、こやとく芋汁もてこ、牛房やある我ハ酒こそよ
けれ、など人々いふ、又女どもの齋して、やよららゝいふ餅とべ
よと、打ぶのめりしたるもいとどめし　酒うりて酔とすよむ
る人しをも浮寝の夢ハ覺したてける

ゆきくして淀のまとりふなりぬる程よ、夜ハあけふけらし、城の
べれ鞍だうくとひ、きて、月の難波の方えらぶなりぬ、浮洲
の芦原霧立りたりて虫の齋耳ふさむく、堤の木立初霜を帯て紅葉
の色目よひやよぬなり、こよより伏見まをい、何はありもあらじ
とて、人々用意とる舟ハたやうこそたてにけれ、人も我もいと
おハくおりたちて、おのがさまくぐ別をゆく、おのれハ船をひ
してやありけむ、足ゆらめくよ

融通念佛勸進帳の序

今ハむかし大原の里ふ良忍上人として、やむごとなき聖いまそあり
けり、欣厭の志深く、朝暮ただ志めやりよ、往生極樂の勝因との
み行し給ふ、なる時聖の夢の中よ、彌陀尊まのあたり示現したま
ひて、融通念佛の行業をなむさづけたまふ、さて説を説て志めし

給はく、一人一切人、一切人一人、一行一切行、々々々一行、是
名他力往生、となむ、いとや具縛の凡夫のお一念の迷情より、
或ハ違順差別の境は述ひて、とこいなへよ生死の薪とつと、或ハ
怨親相待のおもひよ逼りて、ひたすら煩惱の炎を盛よとなるハ、
皆これたがなき我等の性なりけり、然るも真如界の中よハ生佛の
假名なく、平等大慧の中よハ自他の形相なしといへば、唯是、自陀
不二、生佛一如にして、衆生陰忘の一念よ、本来三千れ妙理と具
す、理性已ぶかくの如くなれば、一人の唱ふる處ハ、則、多人の念
佛なり、多人の唱ふる處、おのづから一人の念佛となりて、一多
互み隔てざれば、其功徳も甚廣し、とこそその念佛唱名の齊のうへ

よ、彌陀の願力おのづから加被し給ふが故ふ、一人往生とれば多
人も供ふ往生は、多人已ぶ往生を遂げば一人の往生誰が是を疑ハ
む、故ふ頼とてきたのむべきハ他力の本願、ねがひても願ふべき
ハ安養の淨教あり、こよふ大阿闍梨玄公うき世の塵をいとふ心せ
ちよして、早くより良忍上人の先蹤としたひて、念佛三昧よなむ
注し給ふ、しりるよ今年慶應二年八月の末ばかり、玄公の弟子慧
潤、おのれと諸共よ我立杣ふ物することありき、時よ玄公のいへ
らく、いとよき便りよあれば、みましら二人あよび大原よ至りて、
融通念佛の作法など何くれと授かり来よ、萬我よおはりて物せよ
と、あたらへられつるまよくやおて被里ふいたりぬ、寺ハ蓮華

院則融通念佛堂れりとり、せうこうは阿彌陀堂より、ふたまちは
あり興まりて、いと清らに物静なる處なりけり、頃ハ長月の末な
りければ、前裁の菊の花飾したゆふべの霜よ打しどれて、あつく
咲残るがいとあはれに匂ひ深きと、僧正海公手づからこれを手
折来て、彌陀尊のみまへみ捧げ、はた念佛のゆゑよし何くきと、
つばらみふとき示し給ひて、いとねもごろになむ授け給へりけ
る、是によりて立公あらたふ念佛勸進帖を製造りて、道俗親疎の
隔なく、此會に臨める人の名と念佛の遍數とを、委細に記し付け
て自他諸共よ、往生の因とを結ひなむとす、同發菩提心往生安樂
國の志いと尊くをありけるゆゑ、今此よし物語とる如くよしし

てよとあるまよよ、拙きふじてくだせるふあむ

まよとある御法のむろこれそこのたのむれとけの御國ありける

雨いと久しうふらざりける頃月を見てよめる文月たが

りのことよやありけむ

つきあがふといりてたよせうれしきは雨まつよひの空のうきくも

餘 寒

おもひとつありのころもよむむらむ朝北をゆききんらきのそら

山 寺 時 鳥

おほひえやおろ宮谷のふとよきすたつねとくこそあみさひにけれ

蕃 都 落 花

5
そかし

小草ふむあらのみやこ路をるたけて鹿のをひらにさくらをみる

小簾まきてとよみしとれいらびとのよ夕日れるとよ水鶏みづけいなくなり

梅 雨 晴

あやめふくのきたの朝日おれないと昨日ハあめとまりめつるあ

夏 山

しみさひてみつよよくもたてるあな山てふものハ夏こそハ見ぬ

夕 霧 ぼ

あふのほのたなごころのさすきあてふとる車もなつものさきあな

夏 歌

つちをけてまはりつるあさゆきあけのりてる日よあしく箱まもりな

七 夕

こきよよよつとつと星あすむけてむとんごの箱のくものらとすち

宵女の星あつるあ

身ひとつのあきやなけむゆふつもの玉しく庭ふねしまつりして

草 花

小鷹入をけ入る野路のあきくさいふまねながらふたなとさきあけり

閑 居 森

くもめまで西ふく風よごさいあむさおれよおくのまつむしのことゑ

よたくよむつきく草のあたりまで月ふともあふむしのことゑりな

いとをかし

樹 除 禪

日ぞとふるもりの日り葉の青山もなきうらひへきせみのことある
あまのれのならりの木のけ露ちりてしてくれそめぬる禪のことある
月草れあたる

あきふせふ雲たれたるおほそらのらるよりきよし月くされたる
芙蓉のあたよ

うけきゆくまりのまよきれて一重花あは日よぬれてらまのまよけり
鳴

澤こつふ月をれこしてたつしまのたねのまよむしきのしめのそら
寄名所述様

嵯峨のたな小倉のもみちこれそこのまの春あきのごもど見るもの

初 雪

ふりそめし今朝よりのちにまたや見む木のこの國の雪をまねなる

冬 夜

きつねなく背門のさし原志とふけて風なき夜こそとえまよりけれ

依 花 待 春

さきととくおらひけあらし雪の中に春まつころたなもしるらむ

高野の僧何かしむ遷厝の賀ふ若石生國香といふことぞ

陀羅尼よむこととてとれ高野やま岩ねれこけやとなふらくらむ

雑

ひびきたつたるの野つらひむらの花よりあけてきよはなくあり
春　　夕

みねのおともおろるはよふゆふへのな遠山寺のたなやちるむ
故　　舞　　花

むかしとらうとてし櫻とあるしふてふるとふしもたひ寝とる夜や
橋

谷のけちとりのこし世ふくらふればこのおけたしも大路なりけり
羅窓のあるし柿本大神と西行上人を祭りける時海邊春

春とらふことども
ゆめとのみ難波のたるとふけぬらむあびしの花はなみのうたかた

毛詩標有梅の意と

風待ておつるといそく梅の實も長きくしくい見えとそありける
ある夕くれよ

世の中ふるとしるき身もゆりしきいくれゆくそらの名残ありけり
關　　時　　鳥

ときふけりるとさみり原のふとよきす今あきくらむ不破のせきより
禁　　中　　時　　鳥

雲のうしふあき渡らむむるとよきす数ならぬ身はきくよしとなし
古　　寺　　霜

法の師ぬれしうちあふくひけたえてまきみの原よしもそきらめく

竹取翁のよこし

むさしき竹のこころと思ひしと子とつゝのねとつ得させつるあま
竹の繪ふ

めでたし

世の中のみみしうりけりこの君のこころをそれもこころといせむ

夏 松

日ざらぬまよと駒とめてやとるあま雪しつれせしまつのしたうけ

雨 後 夏 月

すししきいらりいらぬ里もみしむとむらたぬのほとれ月あけ

羈 中 川

ゆきくれぬおほ川のへれ川きりふそてこゝぬれてひとりもねむ

蓮 露

みろとけのむとみの舍利りとたありふ池のえちす葉露ひあるなり

幽 栢 秋 来

やまうけやすよふく風のとせとひよゆふ日うけきて秋い来よけり

燕 夫

真さありふよきほふ御世ハ常盤山ふたきるおとも絶はるありける

柚 人

うつたりみなさたやとおもふ奥山の真木の嬌手をたれふるらまし

阿 難 尊 者

おもひひねよらむとじつゝ手たふるき世のゆめいもめてけいひる

未言戀

このせこふ言さきたよえふさいけとひとりなみたの玉一つめいて

鳩月

来しあたい夕潮さぬよちたえてえのしまやまのつきと見しあま

夕蛙

ゆふさらけなくやがたつの齋のうちよ小田の霞もほましめりして
打あけむ小田井の月のあけとめてゆふくれふりくがたつあくなり

蝶

さくらちるたるけ末野のあさほめよ蝶もうき世のほめやをむらむら
えなのいろはしらみえたる朝あびにいつまで蝶のまむらむらむら

我やどの八重やまふきのえみれいろを羽袖ふしめて小蝶とふあり

照射

あせまたる火くしよりけはたがなきいはれとしがれ命ありけり
さぞ鹿のこびれよることあえれあまかのが身をやくとねれ火影に
ともしさけやまの幸夫もよるしめとともは闇路のまよとめなき

谷紅葉

たがねよりかへけ入日れぬけたぬり谷の本むらいろいろつきふけり
ぬえつあく細たよ川にあけ見えてひとむらもみちいまきありなり

名所月

ひさあたい雲のうへひと来ても見よむつら八月のみやこなりけり

暮 秋

きよきよふ岡のやわたのあきつく夜たつらねさむく秋やゆくらむ
おもあけ

身よそへる殿の若子れおもひけいよそよみ見えそえよとあめむ
くろがみのなぬくさうひし面影いこころのおくみまひまのこころ

戀 枕

あきなりきうらむくこの新まくらおもひそゆへき妻ならむとは

朝 時 雨

あき日ひけ八重さけ岡のもみち葉ふたゆたふ雲やしくれなるらむ

山 家 落 葉

くもさそふ明日乃けしきを見ゆるかなもみちみたるよ軒の山ゆせ

寒 蘆

あしのたる雪とみたるよ難波江のふゆのけしきもひとみ見せたや

こころにくまもの

くれそめしたなよりかくの細殿よとよろありき乃けたひのこして

ある人の賀よ寄田祝

むしろ田にむきあるたつやよろつ世をかさねむ人の思ふとちなる

曉 鶺鴒 雁

あきの戸をおしあけたの春乃雁とこよよいなどおへるらむ

閑 居 花

さくらさくさした山かげのひとつ庵このころ人のたえともはるかな
殿の御子生れおひし御賀よ寄水祝といふことと

たまよつの千世のさくらさきはきの國よ木種まのしよひとせしむらむ
ある人の婚姻の賀よ寄水祝

枝のいけ小松のよとのやましよつ千世のちきりいけむむとふらし

神樂

さりのしあひほしつとふ齋のむらむらみもゆくり庵の火ぬけの
しよき葉の香のしよやけのさふとよまひ人の袖のしよとなり
舞入の手草のさよしよもちりてひとふしきよしあまくらのこと
おもひどのふ

あくしつしよのたえあきさつくとたやたなのむしろよ月の圓居よ
春いたあ秋いつき見てあめつちとよもふうつるふざりこころあ
年のたしめふ

さつあへることろの駒よむちとりて千里たえむらむとよまし
明治二年十二月二十日殿れ御世々々の

御靈長保寺へ遷らせ給ひける又の年の春をみ寄る歌とも

去年までい御階のもとに生ひさりし春のさくらさふむひともなし
ういなりれひるもとひらふ影見えても前のとこれまくひとよなし
口をよきみたま拜むとおりたちて庵のまし水くむひともなし
法の花さきしたるへやしのみらむはれしみあきのうくひすのこゑ

さよぬりの須彌乃臺よたてつるあなこあねのえちちちりふうもれて
まのきみの御魂まつると法の師とこよつとつとつとねのおどいも
ちりつせるとえしのもどはひき伏ていまはあことく拜まつるあな
たる来ぬと殿のうちとぞきよめても君の御たまはいつらざりけり

速山残雪

かへり行く雁のつたさよ山見えてそれびとえがりゆきをぬとめる
あつまぢやきくらえあそく春くれハ雪こそ富士の根よかへりけれ
趣意めつら

朝鹿

しもしろきあしこのえらよなく鹿ハ見つらむ夢のあとやひなしま
兼求の人物を詠ける中よ

蔡裔隕蓋

床のうらやむくらむつちのひととぞふんこけて寒し凍つーらなみ

司馬稱好

おかし
よき人の好とよく見て好といふいあ一き事なき世にこそありけれ

張翰適意

こころゆくのいつきのよこり酒たてんいさよともさもははあれ

戯よ韓致堯の香奩の體み俊ひて思ひつゝけたる歌ども

懶起

面なけふもとけしむるのをとふるひたびたまくらの名残なるらむ

晝寝

千里までへとてぬものとうたよねのあへふと人の見えもすゝめな

忍 笑

あむさしれ玉のぞし鳥ゆらくなりぬみどしのひてそむくあーらふ

遠 見

みやこちをゆくい誰あ子を三の緒のことさとりもちの人もたくひて

踏 音

くれぬとてあへつたる野の小車ようたてひのるよとあことしるるあ

松 下 泉

ひとつ松きぬ着せましとおもふまてまゆく水のことあすすよしき

めでたし

まつかけの三井のし水の真しら玉五百つよとひと手よまかましど

夏 居 所

しんやあふし水をときて小簾まけはせまき家居をすよしりけり

そかし

よきもいらさ世の物のたりきびましと夏のすみびい宇治よちためむ

嶺 上 雲

えなど見しどちの高ねのしら雲ともみちあなしてゆふ日をすなり

折ふふれたる

どりくい山よりいでよ世の人乃しけきとまも見るへありけり

萩

はゆふふ園のあさはき枝しけみこるよしからばとまもるのはよ

詠 史

さよけもは鏡のまし水氷らすいなみこころのさけすやあらま

關 月

えらとりの關のせきそりをもあけもたえてむなしくすめる月あな

神無月たあり桑山氏ふ遊ひて

千町田のなみおしむけとひくれい出しまい秋のもなあなりけり

阿備相原よて

あらくよごことむけまし功さこのましみつふくみしられつ

揚柳山よ詣つる道よて

この子の野まく山まくつむそては蝶もあきつともむつれそとふ

揚柳山よて

此四首みな

いとあはれ

なり

やまてららハ軒端のかけひ筒やれて水もとみあへはあれよけるあな

ぬきおけるそのまらくつとも苦むしぬ麻のあるしやうてよひさしき

ことよたむ童のつげもなありけりあれてひさしきまつの志たいら

やまてらたいつの秋よりあれぬらむ門田のをつものりたりせよ

九月十三日夫田神社の競馬を見えへりて

見る人のこころの駒もきやふらしさすきゆすりてこゑとよむあり

樂 器

笛竹のいつよれ齋のいついほれとよつゝの志らへをまきて身よーむ

神無月たあり有田郡み物して

八丘八谷おふるこちえないろつきぬまとてる姫の手たおおるえて

ちりほへぬもみちを見えて山あたのあふら^た花てりまごりつ
同じ頂鹿の背山をこゆとて

志よりせの紅葉ふみまけこえくれハ袖よこりるよ木あらしのうせ
野 残 菊

きえのこるこそらの星れげたあり冬のあき野ふまくとにやへる
初 霜

さよきなくまのきのもと今朝の霜菊の香ながらむはひそめつよ
海 上 冬 月

むらちとりあく音まよひてまたつこの潮けふさゆるふゆの夜れ月
寄 糸 戀

かけすてしくものいとすちそれとふ玉の緒ふして入やまたまし
くれえとりかりなす糸のたてぬきふおもひみたるよ戀のまぢりあ

神無月いあり香巖草房よ遊ひて
世の中を竹のまぶきよへたてよもいとるのきくの香やいひくよよ

寄 傀 儡 戀
なひきねし草のまくらいり初のうづれごころのすこひありしを

橋 上 冬 月
しもふえてこれらひきけむさゆる夜の月ふあどゆる野路の板をし

ほしろ木ふいさよふ浪もこゆるらし月さえとる宇治のおぼえし
日至香巖草房小集といふことぞ

しまぬけやねふまををしれ夢をびり春のけしきもめぐりためつゝ

速山雪

ふまくれしはらしのそ忍の山の端をゆふ日み見にて雪をれみけり

夕霞

たつゆき明日こそふらめ玉あられ垣根よよせてみせすきぬあり
ひとしきりうつやあられの玉笹みなこりきらめくゆふつく夜びな

月前千鳥

さゆる夜の月のしらさき日のみさきともよひびいしなく千鳥ぬな
つきをゆふこの洲れさきの真砂山おくしも見にてちどりなくなり

竹不改色

あさなく竹のた山とそめかねていたつらにのみとくる霜ひる

霜月をかりあしむし鳴れちたりよて

島のうへにあしぬともよふこ忍さむし浪の千里もしもくもりして

日の御崎と過るほと日くれはてたり

日のみさき月れとさたさありよけり海士のたく羅くるとせしまは

寒樹

かれどかの冬木びなぬのひとつ松それのさるせ乃おとたらくして

池水鳥

なまいたゝぬ大城のそと乃いけ水よあさ日けふりてるもそねふれる

野雪

さひぬ野や雪より外もゆき見えてそよひみきゆる八重のこらなみ
禁 中 梅

くものうへようめやさくらむ此ころの北山おろしすあゆすむなり
朱雀路のやなぎれのせめ^もらじ梅のこつわいはなをきよげり
田 家 梅

ところせき伏家うめのよねひより五百しろ小田もあすをためつ
漁 村 梅

香とめてこやと入といひてまし梅さくころのあし乃八重ふま
あまともめ海苔とるそともたるめきて磯れとちこち梅のさるなり

燕 路 梅

山のついでこのりのことつううめのたなこやうくひすの妻木なるいび

古 戦 場 梅

あつとろえるのあら野のうめのいなあひらよをほさざる入もなし
くえ乃こる古城のむぎのほろしとあ香もいむせひて梅をきよげり

旅 宿 梅

うくひすよゆけりてしてしむるあまの軒端乃梅もらまうさくむ
見しゆめ乃なとり身よしむ梅の香も旅のやどりもなほのしきりな

故 郷 梅

あれてたよめあしきおのどふらふらこの春ぞやほをぬ梅の香とする
ふるさとの梅か香をむし初瀬山りりあひのあねもあすみかねはし

社頭梅

ひせのぼる北野のこや乃らひのきはよのぼりなひてもさける梅のな
ぬみちやましめのうち外のたふぬせふ雪こそとぞれ梅やとくらむ

冬動物

かむなつき日あげたるめく窓の中ふよみひりてとふと蠅ひな

狩場嵐

雪こそふ野邊のほらしいさら鷹の羽ふきよりこそさるひをぬけれ

歳暮祝

たのしきとつとておどねて家こそふ君の世らたふおしのくれひな

待春

さきをむる小瓶の梅れたな見れははれのみたるをまつとしむなし

尊良親王

あなあいれこしのと山れむとくら春のふよきにならひてをちる

護良親王

こころとくひをみるへたるのら櫃のうらむしととむ君の世のよめ

懐良親王

ひともとの菊乃にふひとたのみふてこころつくしの秋もゆぬあり

中納言藤房卿

鷹の業も憂世なりけりもろこしのよしのよおんぶらんとぞりてむ

千種忠顯卿

君のため隠岐のしまりのあらなみふ袖さへぬれてうきめりけむ

尹大納言師賢卿

あはれその小藤のあきのせふのさらハ日枝のみ山も色ばりしと

北畠顯家卿

萩のえみあはれ安倍野の露の間にもちりたてむとはおもひのげきや

楠正成卿

君まさはたる日のとらになりぬへしとおもひしものを櫻井のさと

小楠公母儀

いとつらよ若木の花やちりなましひととをよそをげとならすハ

小楠公

櫻井やむすふもふかきうらみより世よあらしとハおもひをめけむ

楠二郎正時

かせびとる駿手の梅のちりかひにたふとをよそをげとならすハ

新田義貞卿

筑紫まてなごのあらしハふとよりし花はたゆむとよりにこそよれ

菊池武光朝臣

はしのくはなひかぬ草もあかりけり菊の香おくるあきのあらしハ

名和長年卿

うきめりけむのころふとをあらしまてちよハ一木の山さくらえな

名和長重朝臣

おほきみれとふねの綱手ひとすちふ人のこころもよりあはせつゝ
結城入道

きたるせふなひくしと草それならてとの手向よはおまぬへしやは
結城親朝

みちのくればたちの真弓いふなれを親のこころはひきたるひけむ
村上義光

いましはどはなれおひひて芳野山とあゝ志くもちりしゆきりな
小山田高家

まはらどいひくをほらまじ育むきのつゆのなまけと玉の緒にして
本間孫四郎資氏

あつとぎいどおみとこまらよけてきいてその征夫の引ぬへしてよ

赤松圓心

菩提のやまのあつまつほあすとおみとりあゆらにならましものど

淵邊伊賀

土のうちにつめさたよああるものをたれしのが御首とりたる

芳野懐古

よしの山はよふくおせに花ちりてゆくへもしらばなりしたるかな
木ぬくきの道のしとくさたれあふむ花よりのちのみよしのよやま
みぎよきれみあきのえなれ雲間より鴈のゆくへやながめまならむ

笠置懷舊

笠置山夜ふびきあめれおとつれぬのりれ火あけもうちしめりつゝ
笠置川とつもちしるのいろなしてあきのゆくせよちるをみちるな

庚午といふ年のくれに参事瀬見善水の梅の花を折て

おくられたるふ

あめよさけ梅のたつたなこれのそとる世の春乃いときありける
こまつたらいつともまぬ宿ながら春ちあうらしうめあどりきぬ

此時におのれ小松原の里にひやとりせり

ひとりのと見るもあらし梅の花いさうくひけよひと枝まごむ

平末の春のたしめ小松原のやとりはてよめる歌とも

あつまつて神のたまへのうめ乃たなるころひけらし春のあせふく

乃りのたを神の御前ふさくと見しあめのほとよふ今朝のたるびな
和歌のうらの鶴のたちともぬけむらしとよ龜山よたるとせそふく
とまつたらぬむ朝日乃けけ見きい梅もやなきもさもあらはあれ
あすきたつ小松の原はうくひすのたつねきくへきところなりけり
たるとかせ小松あたらにこゑたてつ今いくああらハ子曰なるらむ
おもひきや小松の原よやどりしてせとせのたよとむのふしとは
小松たらのすこにやへりあめやまもあさしちとせの春やたつらむ
梅のたなどりてさけてふかめやまに雪もにやひてたるハ春よけり
うぐひすもまごしりあへぬ春の色と小瓶のうめあ見そめつるびな

おもひとらふ

あはれなる
ことなり

人なみよこのしまむことたのめせめては物のうもらすもあな
瀬見ぬしより鳥の羽の簾ふそへて

簾すらまつけりらむ辨ふべき浮世れりれたぬ庵ハ

とらふ眼をよみておくられる返して

あをなぐこの玉簾手よとりてこころのちりもらさきよめむ

京人越智仙心駒井静文とゆくりなうとて愛宕山と

ひ訪ける時よみて出しけり

愛宕山りみのしるしなありせいみやこのひとふとをれましやハ

とらばやとよて打ふしける頃

雪の身ハ玉よめあらしものゆきよこのこころんもさかしのまじりて

古寺納涼

月やとるふと山てらのいけみつとまよしすしとむけふ夜はあな

山家納涼

蚊のこゑもまれよのまきくおくやまの家居すしき夏の夜はあな

やまはと夏のあつさもなかりけり軒端のらつと背戸のまつらせ

山

鳥いなき雲のまよへとよきしくにやまのこころはうんぬんうらら

三穂の窟ふまありて

いたやとよたてる松の木人ならはむかしひたりもきかましこのど

九月たあり千津川の紅葉見よまありて

明日ちらむゆふ川くまれもみち葉をのけよして秋津とふなり
夕 鹿

あきふらきもみちのおくれ小松山ゆふりけしめてどしおなくなり
明日たよむ狩野のすゑのゆふつく夜あきどつくして鹿をなくなる

雨 中 紅 葉

そかし
みやひとの時雨よがさけひと枝ハ酒あたよめしあまりなるらむ
山めぐりしくれてあへうさくもの末のゆふ日やもみちなるらむ

秋 旅

ゆくすゑ乃木曾路の秋やらむならむ草津のさとのつゆのゆふくれ
あきふらき山のたごまふありぬしてましろなく夜の月も見しうあ

菊 露

とりけしもやのをしら乃菊のたな露のふるひをきよらむにして
車

そかし

月けにひくや大路乃むなくる夜よしとつくうつかひなるらむ

貝

手にとれハ龍の宮居もしのはれて見る目あやあるをたれかひあむ

初 冬 時 雨

まねがれて冬も来ぬらむ野はむさの尾花りそてにしくれふるなり

里 時 雨

水のおとのまくさよなつよありの穂れ雪をみたるよ川をひのさと

初冬雲

かせましりゑくれみとれてきのふ今日雲のまよひも冬めきにけり
寒樹

もみち葉ハ夕日くまなくちりえてしむあしき枝にひせひよくなり
朝寒蘆

あさ日ぬげあしの穂れ上にけふるなり川洲のこほり今やとくらむ
磯千鳥

いとつとひしくる雲のたもとよりこほれ出てもあくちりあな
潮氣のみぞとる磯上のゆふつく夜たしくしくもなくちりあな
寒夜鶺鴒

おりたしむ野澤の水もこほるらしとよのつまよしほなまきたる
さゆる夜の月にはひけもなりけりゆくやいらつと天れたまむら
月枯きたる草をてらけ

しもまよふふ由野の月は八千草のたのあとしよふひけとしもなし
新草のみとりもしもにうつもれてつきひけえろし小野のひれえら
あられを

たしくふうつやあられたさよの葉の露ときえあむ音としもなし

おれを見てこれが評をも加へよとておこせ玉へこの一卷よろち
見るよ名よおふ木國の林よしげき言の葉のなつよも一きは色つや
やある木立たりけりこの木立のあるじとりし法の師の世よはく
れたる才のほどいはゆるこれの人よきよつれどその歌や文や
多くの見きく事もまれなればいひてくと年ごろおもひととりし
とこたびきるやうありてゆくりなく見せ玉へるとおほいかなひて
いとうれしとてこの葉を見て何事ういはいはんなれど御心よそつて
明王院のまむく心じらひせらるよよしもあなればいあみあへど
いとよしとおもふ歌をかとおほゆる詞などそこあよとあらはし
こころむるまたまればむりの心けさみに侍り見ゆやまぢとらん

事どもいなほ更にいひをしつ玉ひてよあなむしこ

明治十一年七月

年 平

海宇の君の

御許よ

丙子四月、予將遊浪華、邂逅和歌山明王院實全師於
漢川舟中、語次及友人新貞老昔南遊之事、師曰、新氏
即寓于吾老師房焉、予驚曰、然與、然則師識卯吉者乎、
師愀然曰、是吾法兄功名也、得度名實雄、不幸短命死、
距今既五年矣、予益驚且歎、語師曰、初貞老歸自貴地、
也、屢稱法兄曰、卯吉和歌有別才、佗日傳柿園之衣鉢、
者、必在此子矣、故吾黨之士、一時傳誦法兄佳篇、余亦
嘗想望其風采、而不圖幽明異途之既久也、後數月、全
師見示其遺稿、予受而讀之、結構之妙、匪夷所思、貞老
以爲有別才、信不虛言也、感歎之餘、遂贍一本、寄示諸

勝、勝

寄八哥
飯田石園、々々亦嘉賞殊寄其文曰、與小野務近藤芳
樹、可相伯仲矣、夫師自幼開口、輒驚人、學亦駁々而進、
其齡僅踰而立、而其造詣、既已如是、苟天假之年、不特
伯仲二氏、于柿園有光、未可測也、噫惜矣哉、今茲六月、
全師寄書曰、法兄七年之忌辰、在九月某日、聞子嚮示
遺稿於石園翁、翁幸爲之評、將併附于活版、以頌舊知
也、請子爲吾屬之于翁、顧師之素志、具見于其自序、非
屑以歌詞著者也、况區々評語乎、然全師之舉、出乎友
愛之至性、而石園亦師之所熟悉、則師靈亦當首肯也、
乃致其意於石園、石園不敢辭、爲註其所見、以還其稿、

予今再讀之、益不勝感歎、因欲附一言于卷尾、然予固
不慣文、何足與之、抑自余識師名以來二十余年、而終
不能見於今生、及一朝與全師相識、輒獲悉其平生矣、
今而思之、殆若師靈之爲之導也、遂識數言以遺之、獨
恨貞老雖猶無恙、怪惚於塵途、不詳其踪跡、于今五六
年、欲示此稿、亦未由也已、

明治十一年八月於西京塚街僑居

寸碧窓下因襟海宇宮原積撰

凡人内含豪邁之氣外見温藉之象者皆能耐事而其
造詣不可測矣如我大暎師是也師幼而穎敏善咏歌
齡過弱冠有感于物而剃髮苦行抖擻遂得法華三昧
矣所咏之歌自有西行上人風趣蓋以其氣象古今相
同也年三十一而歿惜不保上人之壽以得其造詣也
如豪邁之氣温藉之象則觀歌集自序可見矣

倉田 續 識

實雄法師の遺稿を見てしばし驚く事ありさるハ歌よも文よも
いなでならぬ巧ありて意の高きハ驚き實雄ハ原卯吉ぬしハ得度
名とあるよおどろき又たやう身まかりぬとあるふぞおどろく今ハ
昔安政四年の冬古蔭若山よものしけるに卯吉ぬし十六ふして其志
のまめやひなりしも三ろく神園翁の遺風をよくも得たるものひな
おのまひの地よありけるころ雲蓋院僧正のもとふしばしハ伴なひ
ゆきあるは玉泉院に相やどりて歌がとりせし事らと始め名草山
の花のあした玉津島月の夜などさるりとの遊びよも二なく親し
まひし書よも歌おもひつゝ虎玉の年れ四とせ大りと相見ぬ日こ
そなかりしが志きおたみ此巻よびの天才ふ勉強を加へさしむ心と

ごめなきば驚く事も多かるぞかしあはき此人よして餘の短かより
しこそ永き恨にありけれ宮原の君より此巻見せ給ふると返し参
らんとて貴陣師のみたまに告る事あり昔若山を尋りける時君こ
う我を送りしは今遺稿をいふと君を送るよ似たりむかしと今と
此情いつき

明治十二年四月より 小谷古彦

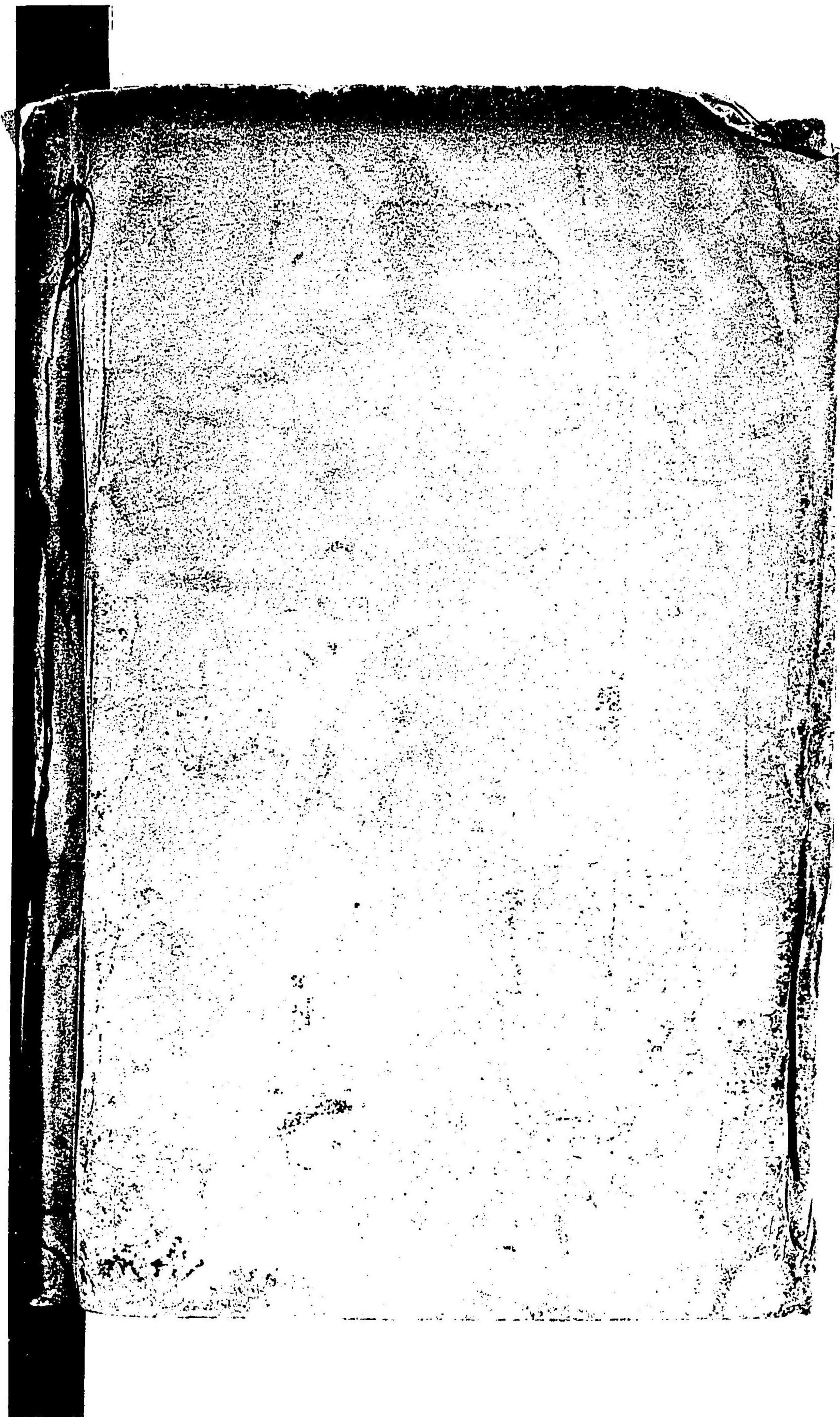
明治三十年八月六日印刷 (定價參拾五錢)
明治卅年八月十二日發行

馬取縣岩美郡國府村大字宮ノ下村三拾九番地

編者 新五郎

馬取縣馬取市上野町二十一番地

印刷兼發行者 松村亮



特43
733

086214-000-1

特43-733

大瞋道人草稿

新 五郎/編

M30

DBD-0964

